

具体的な描写を心がける

～「など」「すごい」の多用を避けるために～

第1468回放送用語委員会が11月10日に広島放送局で開かれた。

外部委員として、脚本家の井上由美子氏、日本大学文理学部教授の野田尚史氏が出席し、広島・岡山・鳥取・松江・山口の5局が参加した。

当日の議論を整理して報告する。

◎「固定概念」という表現について

ダンスをするには地方は不利
固定概念を壊すために世界に挑戦

ダンスの映像と、テロップのみで構成される1分リポート。「世間の思い込み」といったニュアンスで「固定概念」ということばを用いたところ、「固定概念」と「既成概念」という2つのことばを混同して使ったのではないかと、放送後、X(旧Twitter)で、視聴者からの厳しい意見が飛び交ったという。

これについて、委員からは「固定」と「概念」が合わさった複合語であり、意味が明らかに違うわけではないと、比較的、寛容な意見が出た。

「固定概念」が日本語として間違っているとは言いきれないが、混乱を招かないためにも「固定の概念」とするか、より平易な伝わりやすい表現をするのよいだろう。

(言いかえ案)

→ダンスをするには地方は不利

世の中の常識を覆そうと世界に挑戦

◎平和公園を訪れる「観光客」

広島市の平和公園では、きょうも多くの観光客などが訪れる中……

原爆の日の前日の8月5日、平和記念式典のリハーサルが行われたというニュース。「観光客」ということばを使うことに対し、広島放送局内で、遺族感情を考えると軽い印象で不適切ではないかという意見

が出たという。これについて、委員をはじめ出席者からは、特に気にならないという意見が多かった。

しかし、広島放送局で原爆取材の経験がある出席者からは「8月6日が近づくと、広島町の雰囲気は大きく変わる。早朝から平和公園に来て、静かに手を合わせ涙する遺族の方、平和を祈る地元の人たち。『観光客など』の一言で済ませず、そういった人たちについても描写することで、NHK広島放送局として8月5日のニュースで伝えるべきメッセージがより伝わるのではないか」という意見があった。

●「など」の多用を避ける

同じ文章について、委員からは、「など」が気になるという意見があった。「AやBなど」と2つを並べて「など」をつけるのは落ち着くが、「Aなど」と名詞1つに「など」をつけるのは違和感がある、という指摘だ。さらに、NHKはそもそも「など」が多すぎるのではないかと、という指摘もあった。ニュースの現場から、正確性を期すために「など」をつけがちだという事情が説明されると、委員から「など」を減らすための次のような具体策も紹介された。

並列の助詞として「と」「や」があるが、「AとB」というと、それ以外のものが入ってこない。一方「AやB」というと、それ以外のものがある前提となる。助詞に「や」を使えば「など」を使わずに済む。今回の場合、「観光客」以外の具体的な描写をしたうえで「など」をつけないという方法もあった。

(言いかえ案)

→広島市の平和公園では、きょうも多くの観光客や遺族が訪れる中……

◎「献花の動き」「立ち位置」で連想するもの

式典のリハーサルでは、広島市の松井市長が献花の動きや立ち位置を確認していたほか……

「献花」は、神前・霊前などに花を供えること。

また、その花（『明鏡国語辞典3版』）。花そのものを連想する人もいるため「献花の動き」だと「花が動くのか」という印象にもなりかねないと、委員から指摘が出た。「献花をするときの動き」が丁寧だろう。

また「立ち位置」は、①立つ位置、②ある状況の中で、その人が占める位置（『明鏡国語辞典3版』）。市長の立ち位置という、別の意味合いも出てきてしまう。「立ち位置」はテレビ業界でよく使いがちだが、物理的な立つ場所の確認ならば「立つ位置」「立つ場所」としたい。

◎レポートの前説は、丁寧に説明を

琴浦町で、残りわずかな命という設定で大切なものを見つめ直すワークショップが、この夏、開かれました。

鳥取局のレポート「死の体験旅行」。委員からは「せっかくおもしろい内容なのに、途中までイベントの設定がよくわからず、もったいなかった」という指摘が出た。そこで、VTRに先立ってスタジオでキャスターがイベントの概要を説明した前説部分のコメントを検討した。

「琴浦町で、残りわずかな命」というのは、意味がつかず、やや唐突感があった。導入の部分なので、文章を2つに分けるなどして丁寧に伝えたい。

また委員から「ワークショップ」は意味がわからない人もいるので、説明があったほうがよいのではないか、という意見も出た。

（言いかえ案）

→琴浦町で、ある講習会・ワークショップが開かれました。自分の命が残りわずかだという設定で、大切なものを見つめ直すという内容です。

◎「スカラシップ」とは

本場イタリアのバレエ学校などから、スカラシップを受けました。

委員から「スカラシップ」の意味がわからない人もいるのではないか、という意見が出た。

奨学金をもらう、特別な学校に通う権利を得るなど、スカラシップの内容もケースによって異なる。「スカラシップ・奨学金を受けました」など、外来語は丁寧に意味を補足したい。なお、ほかの部分では「プリンシパル（最高位）」「ファイナル（本選）」な

ど、テロップで補足説明がされ、配慮されていた。

◎若者ことばに気をつける

ジュリアちゃんが目標だっていう人は？
お、めっちゃいる。

もう努力はもちろんなんですけど、好きの気持ちがあるからこそ……

2歳から1つのことに情熱持って好きでい続けるって、またすごいですよね。

バレエで活躍する13歳の中学生を取り上げたりポート。スタジオでは、女性キャスター2人が、アドリブを交えて、自然なやりとりをしていた。

明るい雰囲気でも楽しめたが、全体に「若者ことば」が目立った。「めっちゃ」は「とても」、「好きの気持ち」は「好きだという気持ち」にした。

また、スタジオトークの中で「すごい」ということばが繰り返されており、この「すごい」の多用についても、委員から指摘があった。現場のアナウンス担当者からは、今後、しばらく「すごい」の使用を控えて、ほかの表現を探るようにしたいと話があった。心がけ1つで表現の幅がぐっと広がり、具体的な描写につなげることもできる。

◎「〇〇していきたい」という表現

スイスのローザンヌ国際バレエコンクールなどにも挑戦していきたいということです。

「挑戦していきたい」など「〇〇していきたい」という表現も、若い世代を中心に増えている。日本語として間違っていないが、「挑戦したい」のほうがより直接的な表現になる。また「挑戦したい」は“将来にわたって”こうしていきたい、というニュアンスになる。「〇〇していきたい」が口癖にならないように、こうした違いを意識して、使い分けたい。

藤井まどか（ふじい まどか）

第1468回 放送用語委員会（広島）

【開催日】2023年11月10日（金）

【出席者】井上由美子氏、野田尚史氏、
白井正徳 広島放送局コンテンツセンター長、
津田康子 放送文化研究所副所長 ほか